

新興感染症と再興感染症

県感染症情報センター

声なき感染症を知る

◆96◆

近年、「新型インフルエンザ」や「エボラウイルス病」「MERS(マーズ)

「中東呼吸器症候群」「SFTS(重症熱性血小板減少症候群)」「新型コロナウイルス感染症」などの新たな感染症(新興感染症)や、「ジカウイルス感染症」「結核」などの再び注目されている感染症(再興感染症)の流行が、世界各地で発生し、大きな問題となつていきます。今回は、新興感染症および再興感染症の特徴と問題点について、お話しします。

▽グローバル化は感染症拡大のリスク

グローバル化が進み、世界との行き来も容易になり、より身近に世界を感じる事ができるようになりました。

その一方で、今までなじみのなかった、遠い国の問題だと思われていた感染症が、渡航者や貨物を通して持ち込まれる可能性が、以前より高まっています。

また、人や物の移動が高速化、大量化しているために、病原体が(まん)

延する速度が速くなっており、短期間で広範囲に蔓延する可能性があります。

例えば、1918(大正7)年に流行したスペイン風邪は、世界に広がるまで2年かかりましたが、2019年に発生した新型コロナウイルス感染症

は、たった1〜2カ月で世界に感染拡大しました。

▽毎年のように世界各地で報告

新興感染症とは、最近になって新しく出現した感染症の総称ですが、必ずしも新たに発生したものでなく、以前から存在はしていたが、人類がその感染症に遭遇していなかった、認知していなかった、ものも含まれています。

近年は新興感染症の出現が、毎年のように世界から報告されていますが、

世界各地で発生報告 新たな脅威へ対策を

新興感染症の出現に関わる要因としては、自然の開発や気候変動、微生物の適応と変化、検査技術の発展などが影響しています。

新興感染症の例としては、2012年に主に中東地域で流行し、ラクタとの接触やラクタの未加熱肉や未殺菌乳の摂取が感染源とされたMERS、2014年に西アフリカで流行し、致死率が20%(5人感染した場合1人死亡)

から最大90%という高い致死率が特徴のエボラウイルス病などです。

▽新たな知見で脅威が分かることも

再興感染症とは、既知の感染症で、既に公衆衛生上の問題とならない程度まで患者が減少していた感染症のうち、近年再び流行し始め、患者数が増加したのですが、そのなかには、以前はあまり問題視されていなかったものの、その後の新たな知見で公衆衛生上の脅威が分かり、近年注目されるようになった感染症もあります。

例えば、2016年のリオデジャネイロ五輪を機に、世界への感染拡大が懸念されていた、蚊が媒介するジカウイルス感染症です。

ジカウイルス感染症が発見されたのは1947(昭和22)年で、名前はこのウイルスが初めてサルから見つかった場所であるアフリカ・ウガンダの「Zika forest(ジカ森林)」に由来しています。

その後、ヒトからジカウイルスが見つかったのは、約20年後の1968(昭和43)年で、それ以降50年間で何度か流行を起こしながらも、あまり大きな問題にならなかったのは、この感染症の症状が軽度で、感染しても2人

に1人しか発症しなかったりすることにあります。

しかし、その後の研究で、妊娠中の女性が感染すると、胎児に小頭症や先天異常を引き起こしたり、早産や流産に関連があることが分かり、大きな問題となりました。リオ五輪の時に大きなニュースになったことを、記憶している方もおられるかもしれません。

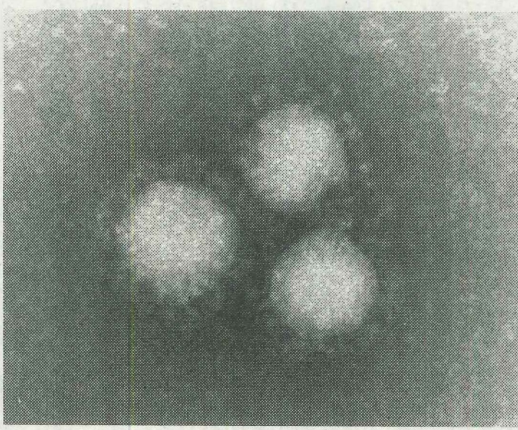
▽感染症の制御が難しい理由

感染症の中には、「人獣共通感染症」という、ヒトだけでなく動物にも感染するものがあります。例えば、鳥インフルエンザや狂犬病などです。麻疹(ましん)などのヒトだけに感染する感染症に比べて、人獣共通感染症を制御するためには、人と動物どちらの流行も同時に抑える必要があるため、完全に制圧することは困難といえます。

▽質の高いサーベイランスで適切な対応をより迅速に

ある感染症を対策する上で「感染する可能性の高さ」と、「感染した場合の深刻度(重症度)」との「積」、つまり、より感染が広がりやすく、感染した場合、重症になる可能性が高い病気に気をつける必要があります。

新興・再興感染症などの脅威に、なるべく早く対応するためには、異常を感知する監視システムである質の高いサーベイランスを構築し、その得た知見から適切な対策を行うことが重要です。



MERS-CoV(中東呼吸器症候群)の電子顕微鏡写真(出典:国立感染症研究所のホームページ)。新興感染症の一つであるMERS(中東呼吸器症候群)は2012年、中東地域に居住、または渡航歴のある者を中心に感染者が報告された。